

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡

1991



福井県立朝倉氏遺跡資料館



上 第74次調査井戸 SE 3990出土遺物（一括） 下 第75次調査全景（北東から）

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡

1991

福井県立朝倉氏遺跡資料館

## 序 文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査整備事業も、昭和42年の湯殿跡庭園などの3庭園の発掘整備以来25年目、昭和46年の特別史跡昇格指定から20周年、朝倉氏遺跡資料館開館10周年、また5月28日には館跡などの4庭園が国の特別名勝に指定されるなど、平成3年は大変記念すべき節目の年になりました。

発掘調査も順調に進捗しており、これまで城戸ノ内の主な遺構、館、武家屋敷・寺院、町屋などの発掘を手がけて参りましたが、どちらかと申しますと一乗谷川の西方に多く分布し、東方の調査はあまりなされていませんでした。

本年度は、朝倉氏遺跡発掘調査整備中期10ヶ年計画の第5年次にあたりますが、今回は一乗谷川東側の民家に囲まれた権殿地係で発掘調査を実施しました。やはり他の地区と同様、びっしりと隣接して、中規模武家屋敷から小規模屋敷まで多数の屋敷跡が発掘されました。洪水の氾濫などを受けたらしく、遺構の残存度は必ずしもよくありませんでしたが、礎石建物や井戸、石積施設、土塁、道路、溝、埋甕、蹲踞様遺構などが検出されています。

小規模屋敷の井戸から茶器がまとまって出土するなど、茶の湯の隆盛を物語っていますが、越前焼の茶入はこの時代のものとしては初めての出土ではないでしょうか。その他九頭竜川上流から持ち込まれたと思われるシジミガイを主とする化石、身体を温めるための温石など、朝倉氏遺跡初出土のめずらしいものもあります。

環境整備事業では、本年度から「ふるさと歴史の広場」事業で、朝倉氏遺跡の町並立体復元工事が開始されたため、後ほどまとめて報告することとし、今回は掲載しないことにしました。

最後になりましたが、事業の執行にあたり、文化庁はじめ関係各位の皆様、地元の方々には大変お世話になりました。心から厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

福井県立朝倉氏遺跡資料館  
館長 藤原 武 二

# 例 言

1. 本書は、福井県立朝倉氏遺跡資料館が平成3年度に実施した国庫補助事業による発掘調査の概要報告である。
2. 平成3年度は発掘調査中期10カ年計画の5年目にあたり、本書には、第74・75次調査（権殿地係）、ならびに現状変更申請に伴う家屋新築工事前の事前調査2件（第72次調査—細田一美宅、第73次調査—大西利信宅）の結果を収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査員の討議、検討を経て水野和雄が編集を担当した。また、執筆については文末にその名を明記し、文責とした。

# 目 次

巻首図版

序文

例言

目次

頁

I. 平成3年度の調査概要 .....	1
II. 第74次調査 .....	3
遺 構 .....	3
遺 物 .....	8
III. 第75次調査 .....	13
遺 構 .....	13
遺 物 .....	17
IV. 第72次調査 .....	21
遺 構 .....	21
遺 物 .....	22
V. 第73次調査 .....	24
図 版 .....	PL. 1～PL. 13

# I. 平成3年度の調査概要

本年度は、「発掘調査・環境整備事業中期10カ年計画」の第5年次にあたる。発掘調査は、福井市城戸ノ内町8字「権殿」地係の約2,600㎡について実施した。調査期間は、平成3年4月1日から12月25日までであった。この間、4月1日から30日までは23字「斉藤」地係で立体復元工事に伴う土塁の確認調査を、4月8日から10日までは上城戸のすぐ北側で「一乗谷川水辺空間整備計画」に伴う事前調査として、トレンチ2本を設定し補足調査を行った。また、5月7日から27日までは城戸ノ内町6字「中惣」地係で、6月25日から7月6日までは9字「兵庫」地係でいずれも「現状変更許可申請に伴う家屋新築工事」の事前調査を実施した。

本年度の通常環境整備は、国庫補助事業「史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）」が採択され、一乗谷朝倉氏遺跡町並立体復元工事が開始されたため、平成5年までの3年間は実施を見送ることとなった。

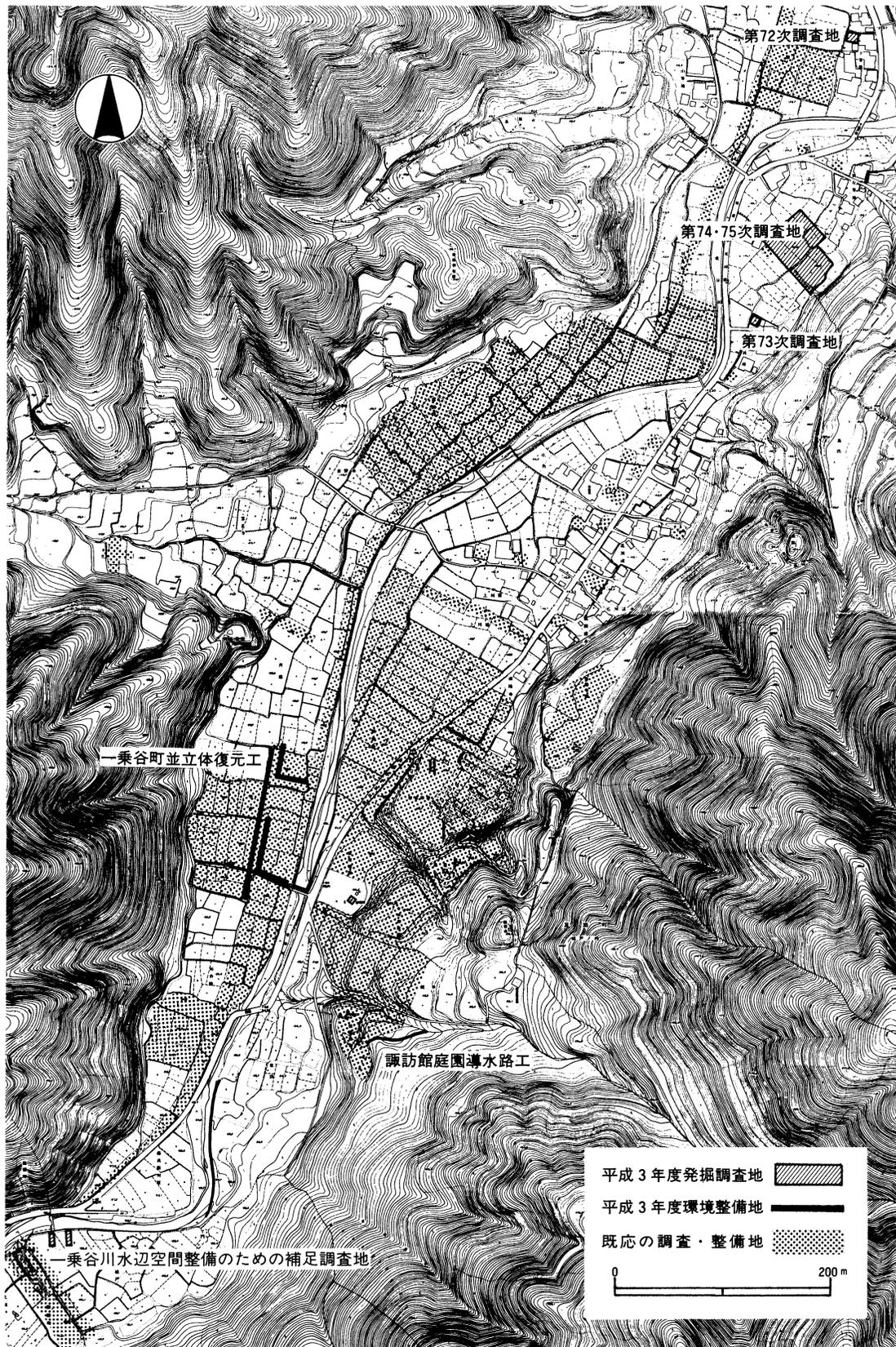
平成3年5月28日、名勝一乗谷朝倉氏館跡庭園 附南陽寺跡庭園（昭和5年文部省告示第180号、昭和42年文化財保護委員会告示第68号）を特別名勝に格上げ指定し、名称を「一乗谷朝倉氏庭園」に改める旨の文部省告示第61号（文部大臣井上裕）があった。これを受けて、福井市では朝倉館跡庭園に説明板を設置し、福井県は諏訪館跡庭園に導水路工事を実施した。

10月17日から3日間、福井市で「第26回全国史跡整備市町村協議会大会」も盛大に開催され、資料館にとっても、発掘調査開始25年、特別史跡指定20周年、県立朝倉氏遺跡資料館開館10周年にふさわしい記念すべき年となった。（表－1）（水野和雄）

調査回数	変更箇所	期間	面積	変更事項
—	城戸ノ内町(川合殿・斉藤)	4月1日～4月30日	360㎡	町並立体復元工に伴う土塁確認調査
—	“ (上城戸)	4月8日～4月10日	50㎡	一乗谷川水辺空間整備計画の補足調査
72次	“ 6字(中惣)	5月7日～5月27日	210㎡	細田一美宅新築に伴う事前調査
73次	“ 9字(兵庫)	6月25日～7月6日	70㎡	大西利信宅 “
74・次 75	“ 8字(権殿)	4月1日～9月9日 9月10日～12月25日	2,600㎡	発掘調査
76次	安波賀町(水窪)	10月21日～12月17日	500㎡	一般県道側溝・歩道改良工事に伴う事前調査(受託事業)

環境整備箇所	期間	整備事業
城戸ノ内町(川合殿・平井・斉藤)	11月1日～4年3月31日	「史跡等活用特別事業」による一乗谷町並立体復元工
“ (上蛇谷)	10月7日～10月16日	諏訪館庭園導水路工(県単)100m分

出土遺物保存処理	4月1日～4年3月31日	鉄製品450点、銅製品280点、木製品372点
----------	--------------	-------------------------



第1図 発掘調査・環境整備位置図

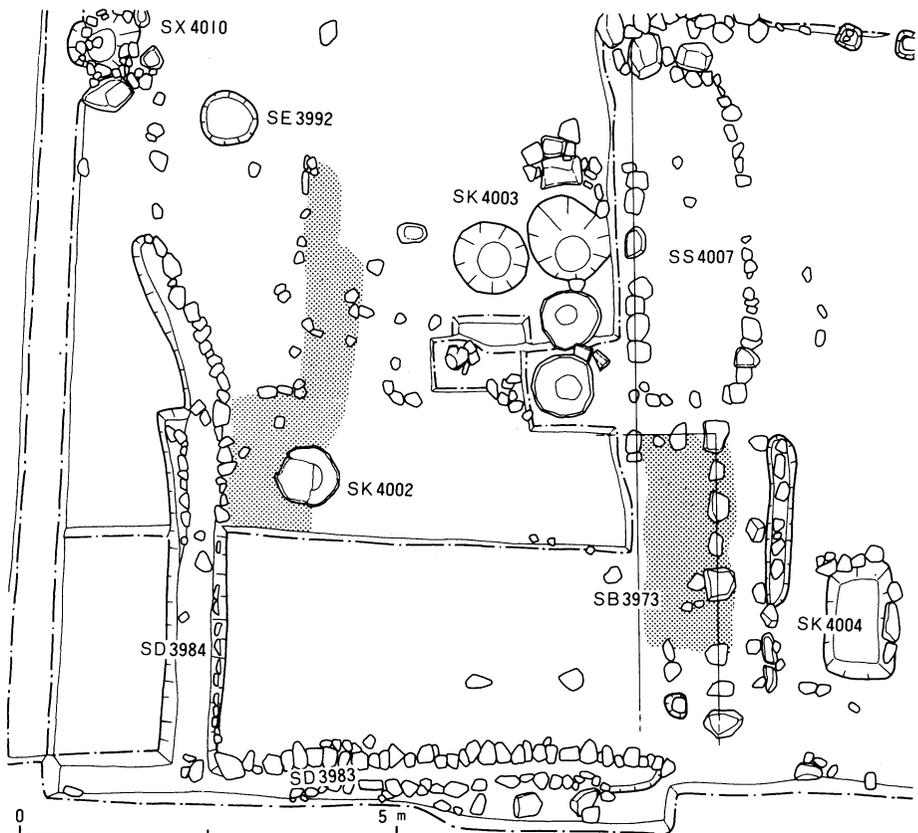
## II. 第74次調査

本調査は、福井市城戸ノ内町字権殿地係2,600㎡を対象とする。調査対象地はこの地系のほぼ中央部山寄りにあって、第34次調査で既に検出している東西土塁（S A 1330）に軸線を沿わせてグリッドを設定した。調査期間は平成3年4月1日より12月25日までであった。又、調査の都合上面積を折半し、西半分を前半期に調査し74次とした。東半分を後半期に調査し、75次とした。

字権殿は一乗谷川の右岸に位置し、川を挟んだ正面には道福谷が開いている。下城戸とは直線距離にして約500m、又朝倉館からも北東約500mの位置にあり、これらのほぼ中間的な位置にあるとも言える。東側の高台には「馬出」や「上殿」がある。そこから奥の山つきには「小城」、「小見放城」の山城が並立して存在する。「馬出」からは、本城である「一乗城山」に至る山道が開かれており、当時の「大手道」と言われている。又、「一乗谷古絵図」には「朝倉権ノ頭」の屋敷跡が記されている場所にあたる。

### 遺 構 (PL. 1～3)

本調査区は全測図(第4図)に示すとおり、南側には東西方向に走る道路SS 4008があり、これに面して土塁S A 3970をもつ約25m四方の屋敷跡がある。この屋敷跡の北には10m×20mの

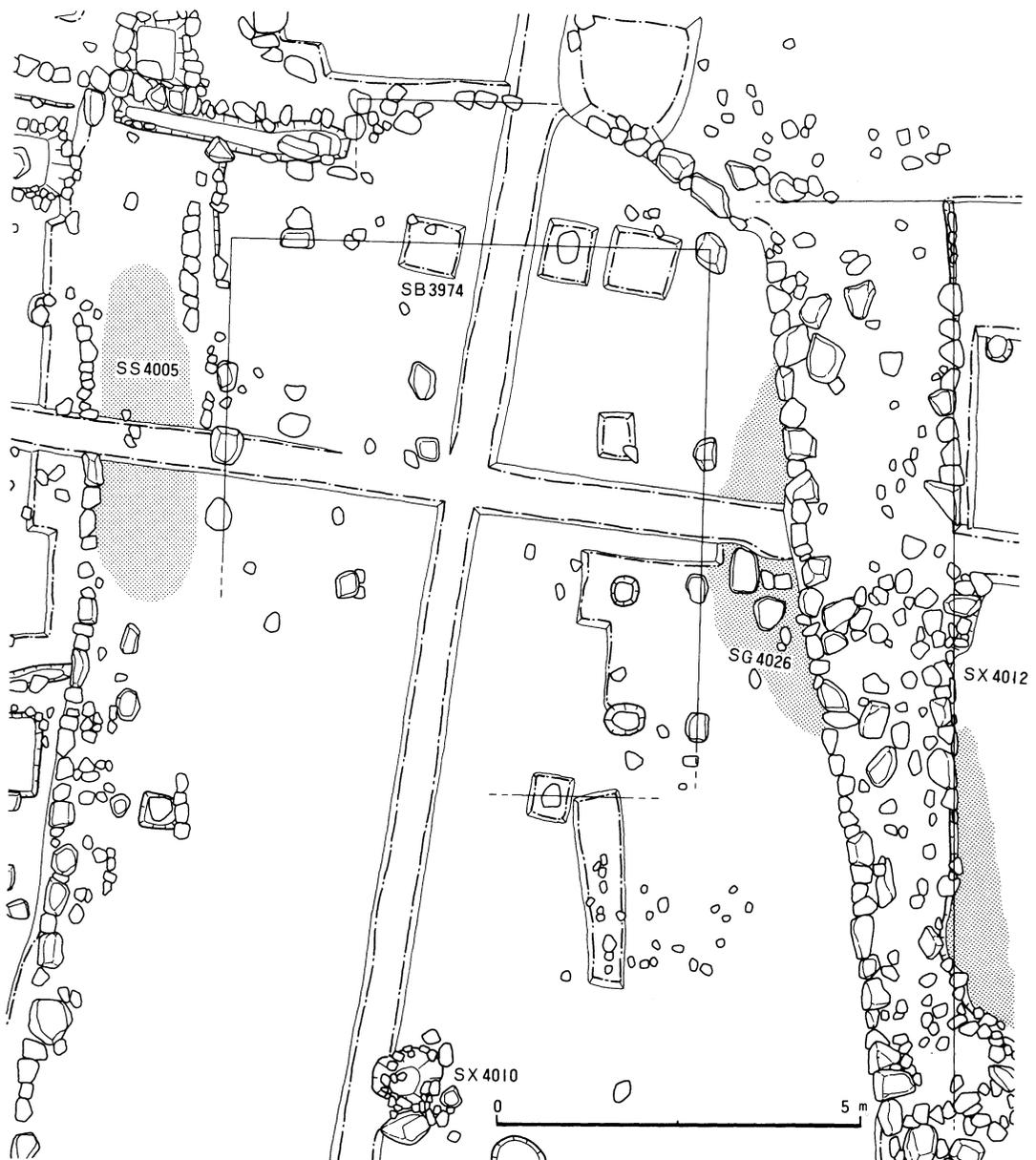


第2図 第74次調査遺構図(1)

長方形区画があり、礎石建物 S B 3974 やカメビット S K 4002・4003 が検出された。これらの更に北側には地口約 9 m 前後の長方形区画が並列して検出された。これらの区画はおそらく北側に開く入り口をもつと考えられる。

S K 4002・4003 S K 4002 は単独の埋甕遺構で大甕 (40) が埋置されていた。S K 4003 は計 4 基の大甕が埋置されていた (38、39、41、他)。この埋甕遺構は溝 S D 3983 と S D 3984 によって区画される礎石建物 S B 3973 に取り込まれているものと判断され、更に S S 4007 を伴うものと考えられる (第 2 図)。

S B 3974 埋甕遺構の東側には礎石建物 S B 3974 がある。入り口は S S 4005 が走る北側と

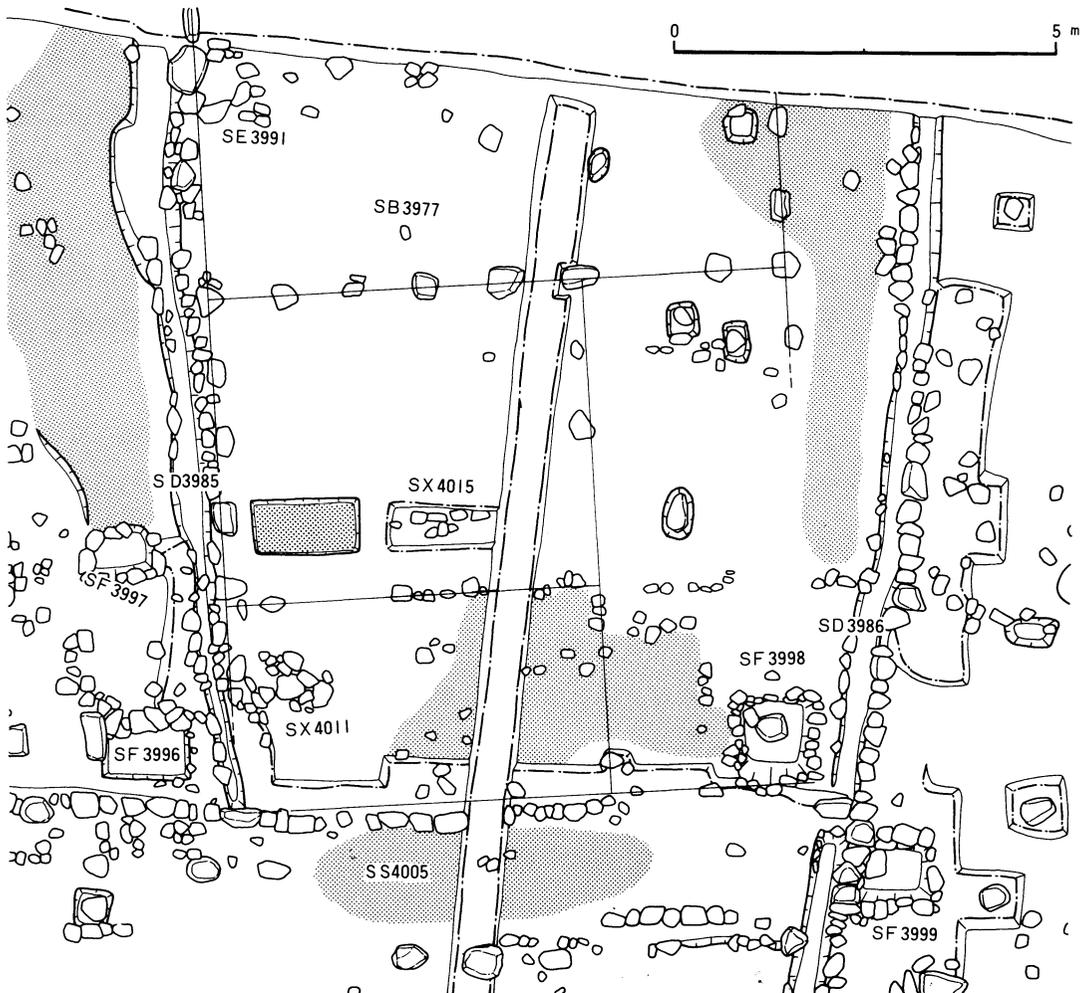


第 3 図 第 74 次調査遺構図 (2)



見られ、間口7.7m、奥行き5.8mを計る。奥側に庭園遺構S G 4026が伴う（第3図）。この区画は南側の土塁S A 3970をもつ区画と、北側の長方形区画群に取り囲まれた状況を示しており、出入口は通路S S 4005を使用したものと考えられる。ただ、この通路は調査区の設定の都合もあって、どこに延びていくのか確認することはできなかった。この通路から呪ないの魔除けに使用されたと考えられる墨書カワラケ（43）が出土した。

S B 3977 調査区の北側は前述したように、地口約9 m前後の長方形区画が並列して検出され、それぞれ北に入り口が取り付くものと見られる。調査区は概ね区画の南側半分を発掘したかたちとなった。未発掘部分12~15mのところ畦石垣があり、これらの区画の境界線を示すものと見られる。第5図に示した区画はちょうど中央に位置する長方形区画で、南北に長いプランを呈する。幅7.5mの礎石建物S B 3977が敷地いっぱいに見られる。礎石の遺存度は良好である。薄く炭・焼土層が見られた。井戸S E 3991が西側に偏って取り付く。南東コーナーには石積施設S F 3998がある。



第5図 第74次調査遺構図(3)

## 遺物 (PL. 4～6)

本調査区における出土遺物の総点数は26,518点を数える。面積約1,730㎡の平米あたり密度は15.3点/㎡となる。朝倉館での9.86点/㎡や出雲谷(20次調査)での5.3点/㎡、あるいは平井地区15次調査での8.5点/㎡と比較して多いが、町屋地区や寺院での出土例から見ると少なくなっている(小野正敏1984『貿易陶磁研究No.4』参照)。全体には遺構の遺存が良く、遺物の出土も「町屋」地区の例と類似するものと考えられたが、さほど数値が延びていない。これは土壘S A 3970の区画が後世の洪水による河川の氾濫で流出、削平を受け、遺構の遺存があまり良くなかったことが起因しているものと思われる。しかし下層掘り下げを行った結果、比較的多量のカワラケが出土したことで、ある程度数値が回復したような現象を呈している。

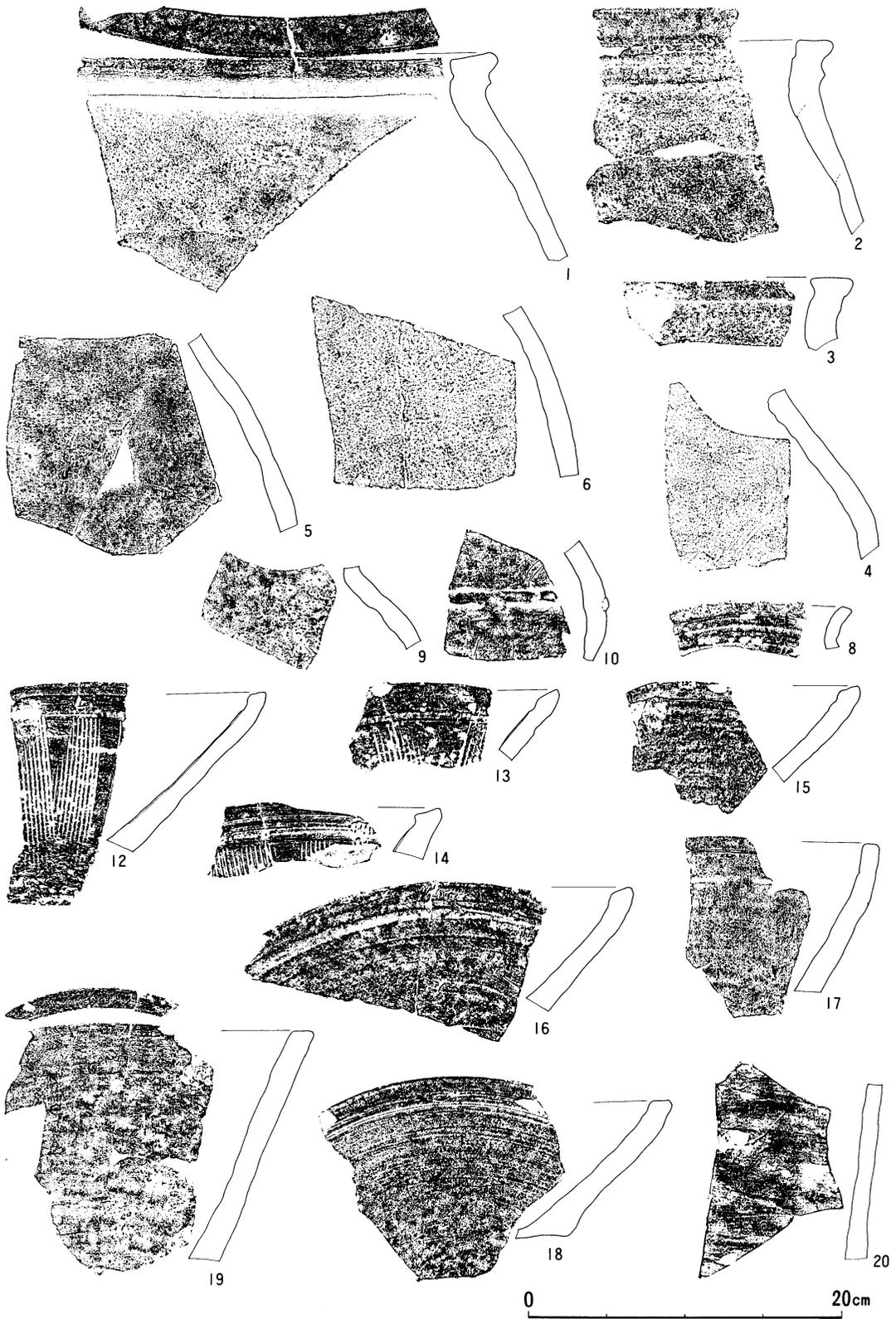
内訳は越前焼4,162、瀬戸・美濃焼176、土師質土器19,162、瓦質陶器その他83、中国製陶磁器1,739、朝鮮製陶器その他60、金属製品80、石製品330、木製品その他364であった。

前述の土壘S A 3970をもつ区画は遺構の遺存状態が良くないため、その広がりをおさえる程度であったが、その西隣や、調査区北半部において「町屋」と考えられる長方形区画が検出され、遺構の遺存状態は比較的良好であった。出土遺物は第6・7図井戸S E 3993出土遺物に代表されるように一乗谷の最盛期段階の組み合わせの状況をよく反映している。

井戸S E 3993出土の遺物は、概ね井戸のプラン確認と下位約1 m前後掘り下げた段階での遺物であり、井戸底まで完掘したものではない。従って、一乗谷廃絶直後に井戸周辺の遺物がかき集められて、井戸埋めのために投棄された可能性のあるものである。

1～20は越前焼の甕、壺、播鉢である。21、22は黒釉碗、23～29は青磁の袋物、及び盤、菊皿である。そのうち23の袋物と見られる花瓶や24の鎬蓮弁の大皿は同一個体の破片が井戸周辺の遺構面より数点採集されている。30～33は白磁の端反皿、杯である。その他にも図示できなかったが、石製の盤やバンドコが数個体分出土している。

特殊な遺物として、化石と見られる石塊が井戸内より出土した(37)。縦横30 cm前後の矩形を呈し、一面は研磨したような、滑らかな面になっているが、他は打ち割りのままの面と考えられる。興味を覚えるのはその表面に見られる「爪」と、あるいは「花びら」のような模様である。福井県立博物館東洋一氏の指摘によると、「桑島の爪石」と呼ばれる化石の1種で、白山手取統の岩層で産出するシジミガイを主とする砂岩質の化石が、手取川の転石となって流出し、化石化していたシジミガイの石灰分が溶けだして、あたかも「爪」で押し付けたような痕跡を呈しているものである、という。この種の化石は九頭竜川上流にも分布している可能性があり、あるいはここから朝倉氏時代に一乗谷に持ち込ま



第6図 第74次調査S E 3993出土一括遺物(1)

れたものとも考えられる。

埋甕遺構 S K 4002・4003からは、計4個体の大甕と2個体の中甕、1個体の壺が出土した(PL.5)。38~42はいずれも復元し得た資料を図示した。大甕38~41は、いずれも一乗谷最終段階のもので「IVc期」に属する。しかし、39の大甕については、器型が他よりもひとまわり小振りで、口縁部のナデや凹線も少し違う。他の3個体より、更に後出的な印象をもつ。

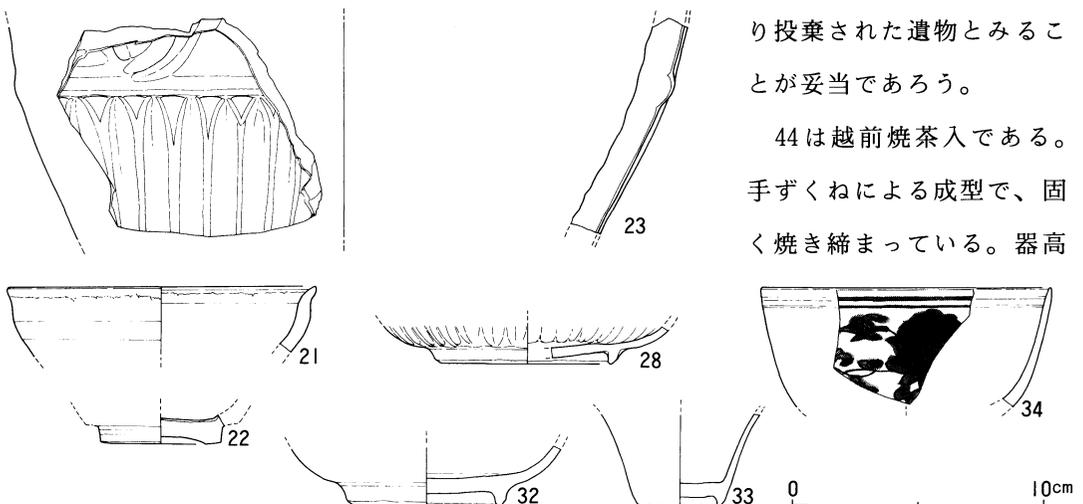
43は通路 S S 4005より出土した墨書カワラケである。他に同様のものがもう1個体分出土している。分類上は一乗谷カワラケのD<sub>1</sub>類に属する。見込みに圏線を引き、さらに縦方向に2分割の線を引き、左に「月・月・月……」、右に「鬼・鬼……」そして、その空間に「梵字」を書き込んでいる。裏面は分割線が上下に見られる。他の1点にも同様な書き込みが見られる。「魔除け」の呪ないに使用された、土師質土器の「転用例」の1種である。「月・鬼」の描かれたカワラケは第51次調査例に次いで2例目である。

第8・9図には、この S S 4005や S K 4002・4003と同じ区画に属する礎石建物 S B 3974の、遺構面より出土した遺物を示した。越前焼、瀬戸・美濃焼ともに最盛期段階の組み合わせを良く示すものが見られる。中国製陶磁器については、比較的まとまった量で白磁の端反り皿、菊皿が出土した。

調査区北側の小区画群のうち、西側に位置する区画の井戸 S E 3990からは44~49(PL.5)の茶器が一括で出土した。完型に復元し得た本資料の他にも、鉄釉の瀬戸天目茶碗が1個体分、瓦質香炉が1個体分出土している。この井戸は焼けた壁土を含む焼土が多く見られ、他の遺物としては越前焼、カワラケ、木製品などがある。一括遺物はこれらと混在するかたちで出土している。層位も遺構面に近い、浅い位置からの出土であった。従って、井戸使用時の遺物というより、廃絶段階あるいはそれ以後の水田化に伴う削平・攪乱により

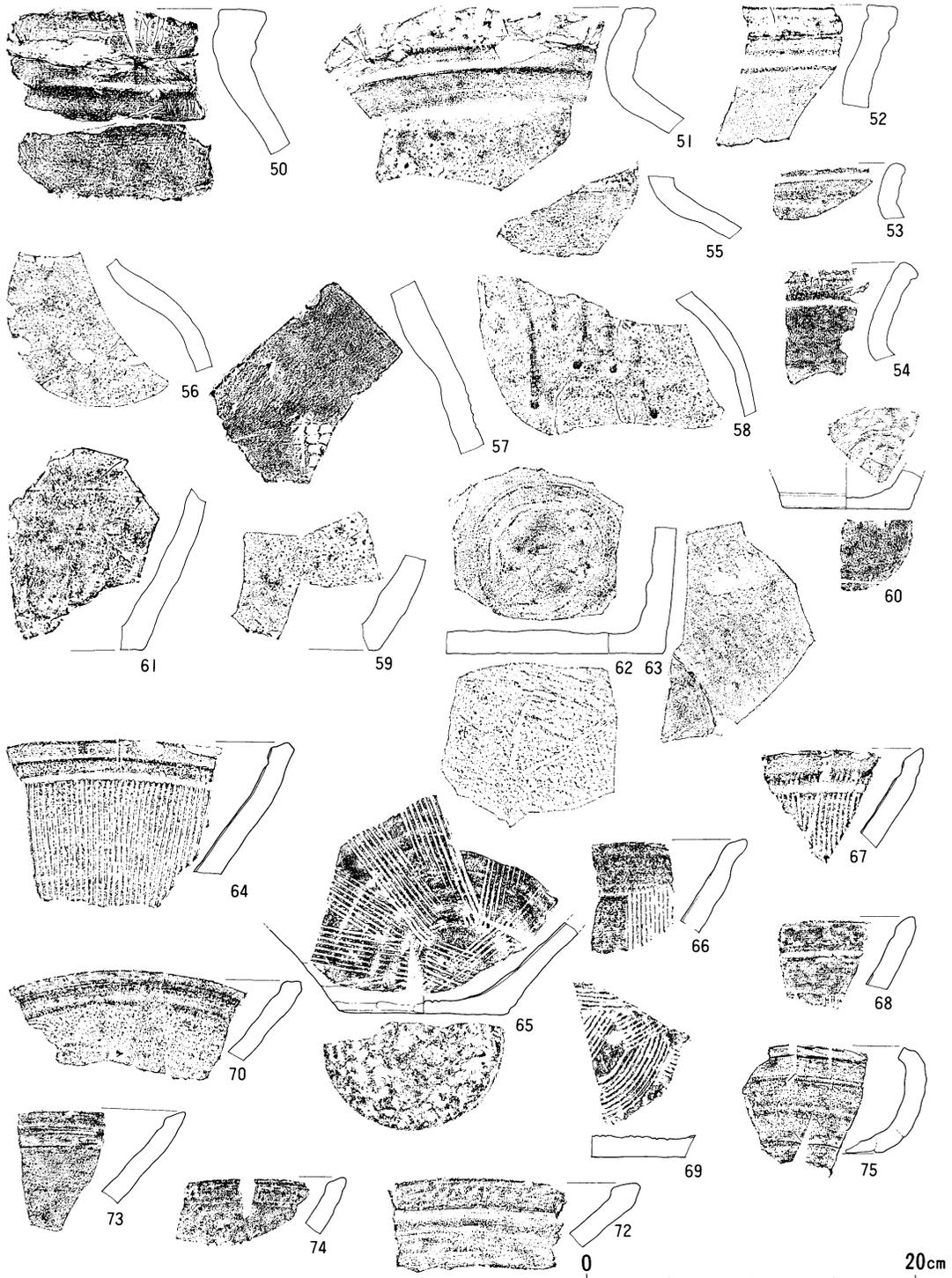
投棄された遺物とみることが妥当であろう。

44は越前焼茶入である。手づくねによる成型で、固く焼き締まっている。器高

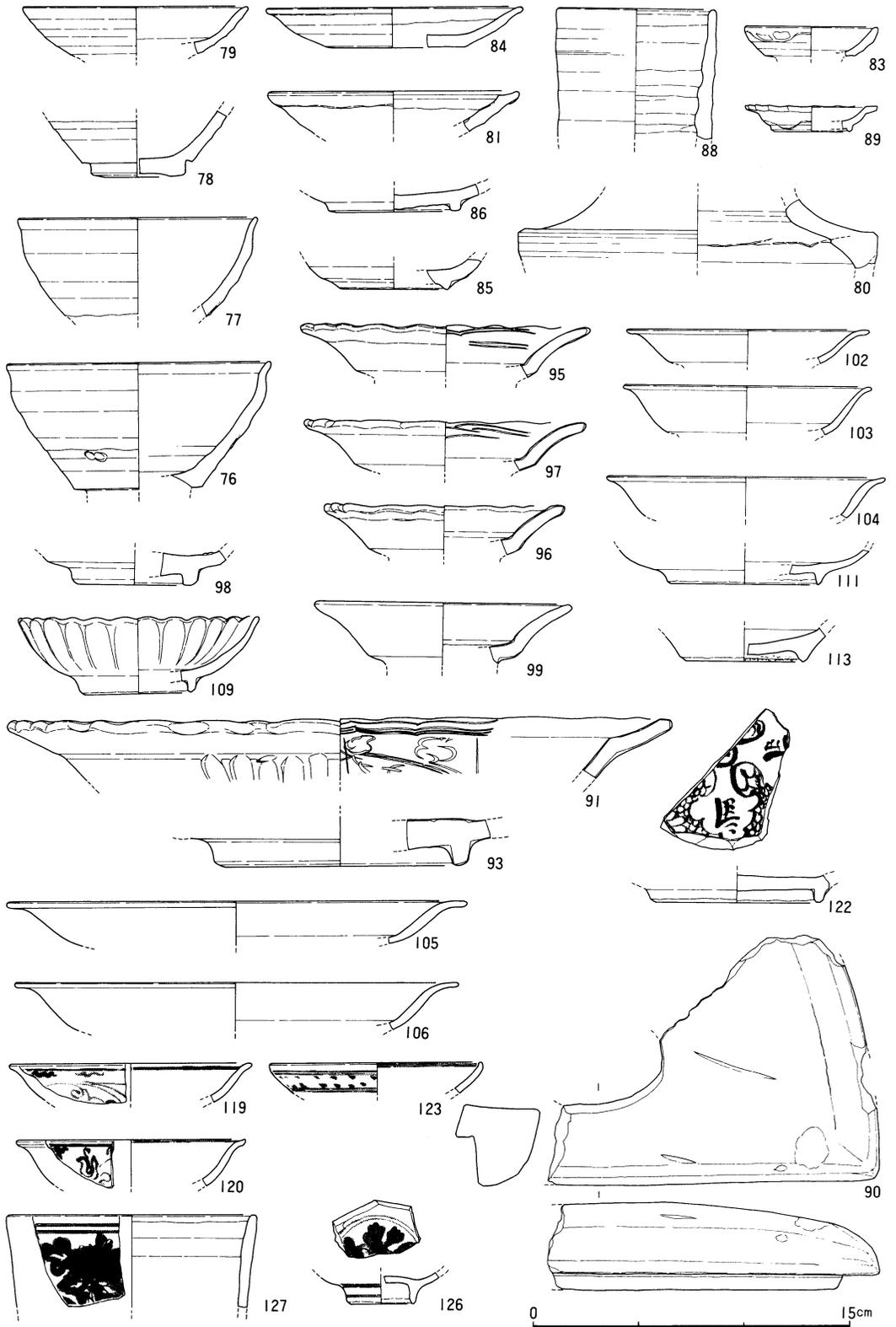


第7図 第74次調査 S E 3990出土一括遺物(2)

6.7cmを計る。45～47はいずれも天目茶碗である。45は口径11.4cmで、通有のタイプである。46・47は口径8.7、8.4cmを計り、いわゆる小天目形を呈す。飴釉がタツプリと施釉され、発色も良好である。48は大海形の茶入である。49は青磁香炉である。49は青磁香炉である。(南洋一郎)



第8図 第74次調査SB3974出土遺物(1)



第9図 第74次調査SB3974出土遺物(2)

### Ⅲ. 第75次調査

この調査は、第74次調査地区の東隣約970㎡で実施した。調査期間は9月10日から12月25日までの約3カ月半である。第74次調査地区と同じ字「権殿」の一角であり、『一乗谷古絵図』に「朝倉権ノ頭」と記されている部分にあたる。

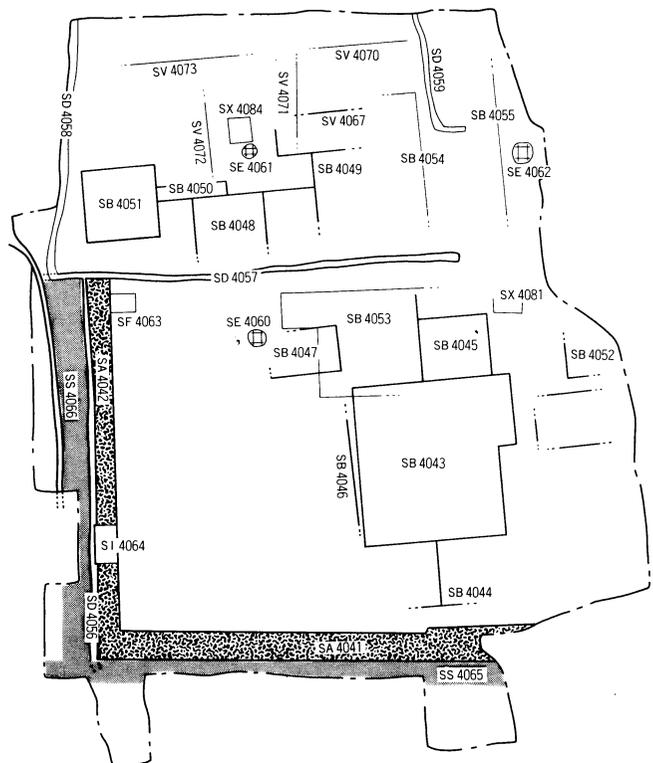
#### 遺 構 (PL.7～9)

当調査地は、第74次調査地区よりも東の山裾にあるため、洪水による遺構の削平は免れていたが、最終遺構面が耕土直下と浅く、後世の整地などによって、土塁・溝・井戸・石積施設等基部のしっかりしたものや、下方に掘り込まれた遺構を除く建物の礎石など是一部を残すのみであった。これに比して下層の遺構は残りも良く、礎石建物等の存在を確認することができた。このように各遺構は概ね2時期に分かれるが、中間の時期に当たると思われる遺構もあり、今後整理が進めばさらに細分できるかも知れない。ここでは前後2期の区分にとどめ、以下にこれらの内主要な遺構について記述する。なお、ここで使用する方位は、通例に従い便宜上一乗谷川側を西、山側を東として記すことにする。

**S S 4065** 調査区南辺で検出した東西方向の道路である。前・後2期にわたる。固く締まった砂利敷で、幅約1m、長さ約20m分を検出した。この道路は西に延びて74次調査区のS S 4008につながる。

**S S 4066** 調査区西辺で検出した南北方向の道路である。前・後2期にわたる。表面は拳大の礫と砂利で踏み締り、幅は1.3～1.8mで、長さ約20m分を検出した。東西両側に溝S D 4066・4090を伴う。

**S A 4041** 屋敷の南を限る東西方向の土塁である。前・後2期にわたる。2～3石の石積で、幅は約1.5mである。東の山裾部分は未調査で、約20m分を検出



第10図 第75次調査遺構模式図

した。西端でほぼ直角（約93°）に北に折れ、もう一本の土塁 S A 4042となる。コーナー外側の石は抜き取られている。西端から東へ約23mの地点の内側（北側）では、石積列 S X 4079が土塁に取り付く。

**S A 4042** 屋敷の西を限る南北方向の土塁である。前・後2期にわたる。2～3石の石積で、幅は約1.1m、長さ約20mである。南端から約6m北に門 S I 4064が開く。また、門から北へ約11mの所に屋敷内の排水のための暗渠 S Z 4089が設けられている。

**S D 4056** 道路 S S 4066の東側溝である。前・後2期にわたる。幅約0.3～0.5mで、東側面は土塁 S A 4042の石垣を利用し、西側面は素掘りである。

**S D 4057** 調査区のほぼ中央を東西方向に流れる石組溝である。前・後2期にわたる。直線的でなく、幅も一定せず、1～2石の石組みも雑である。長さは約22mあり、西端付近で S D 4056が流入した後北に折れるが、西端コーナーの石は後に閉塞したもので、それ以前の時期には、そのまま S D 4090に流れ込んだものと思える。

**S B 4043** 調査区南東部で検出した前期の礎石建物である。東西約7.5m（4間）、南北約8.5m（4.5間）の規模で、東北部に東へ半間、南北2間の張り出しが付く。

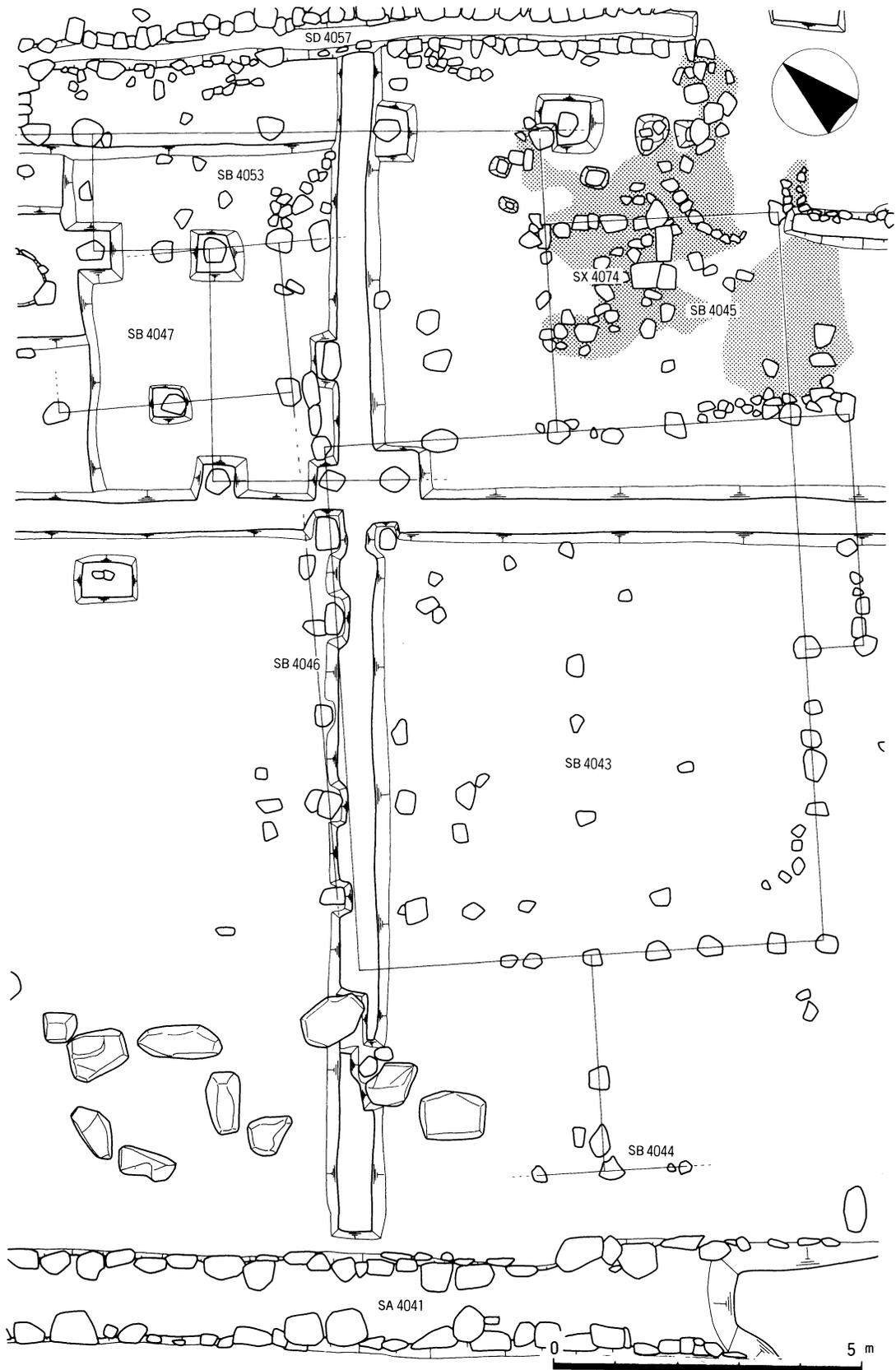
**S B 4045** S B 4043の接する前期の礎石建物である。東西約3.76m（2間）、南北約3.3mの規模で、内部には平たい石や礫が敷き詰められており、表面は5～10cm程の炭層で覆われていた。

**S B 4046** S B 4043の西辺に接する前期の礎石列で、5石を検出した。礎石の方向は、S B 4043に対し北で約2度西に振れる。南の4石の柱間は約1.41mで、1.5間を二等分した寸法に当たる。

**S B 4047** S B 4043の北西に位置する前期の礎石建物である。東西約3.76m（2間）、南北約2.42mの規模で、5石を検出した。東辺の2石は、S B 4046の礎石ラインの延長線上にある。

**S B 4048・4049・4050・4051** 調査区北西部、東西溝 S D 4057の北で検出した前期の礎石建物群で、東から S B 4049・4048・4051の順に並ぶ。S B 4050は、東西約3.76m（2間）、南北約0.76m（2.5尺）の規模で、S B 4048と S B 4051を結ぶ廊下的建物と考えられる。S B 4048は、東西約3.76m（2間）、南北2.82m（1.5間）を検出したが、さらに南へ延びる可能性もある。S B 4051は、床に表面の平たい石を用いた石敷 S X 4077を伴う建物で、東西・南北ともに約3.76m（2間）を測る。また S B 4049の北に約1.88m（1間）離れて、東西方向の石列 S V 4067があり、これらの建物に関連する遺構と考えられる。

**S I 4064・S B 4091** 土塁 S A 4042に開く門と建物である。西（外）側の石列は、約2mにわたって土塁のラインより0.2m程度張り出すが、東（内）側は石列が無く、土塁のライ



第11図 第75次調査遺構

ンに沿って屋敷内に下がる僅かな段になっている。S B 4091は礎石が2石の棟門で、土塁幅のほぼ中央にあり、柱間は約2.12m（7尺）を測る。

S B 4053 調査区のほぼ中央、溝S D 4057の南側に位置する後期の礎石建物である。東西約8.52m（4.5間）、南北約5.68m（3間）分、11石を検出した。建物の方向は土塁S A 4042のラインとほぼ一致する。この建物の東に、20～30cm大の石を「コ」字状に積み並べたS X 4081がある。内側は炭が多く、炉跡と考えられる。

S E 4060 S B 4053のすぐ西で検出した後期の井戸である。深さは約3mあり、上部へ向かって径をやや小さくするせり出しが見られ、天端の直径約0.9mであった。

S F 4063 土塁S A 4042の北端内側に設けられた後期の石積施設である。東西約1.4m、南北約1mを測る。3段の石積みで、西面は土塁の石組を利用している。

S D 4058 調査区西辺を北流する後期の溝である。長さ約14mを検出した。西側面は石を2～3段積んだ比較的雑な作りの石組であるが、東側面には石組が無く、素掘りである。南端部には笏谷石製の板石が渡され、ここから北の部分約3.5m程には石組が無く、両側面の補強に板状の木材を用いている（S X 4086）。

S D 4059 調査区北東部で検出した、L字状の後期の石組溝である。東側の石組は、元は西に面のある南北方向の石列S V 4069に続いていたようである。

S B 4054 S D 4059の西に位置する後期の礎石建物である。東西約0.95m（0.5間）、南北約6.63m（3.5間）分を検出した。建物の方向は、S B 4053に比べ北で約6度西に振れる。

S E 4061・S X 4084 調査区北部で検出した後期の井戸である。天端の石組は崩されているが、直径約0.8mである。この北に接するS X 4084は、一辺約0.7～0.8mの平坦な石を中心に、周囲の表面の平たい石を配した遺構で、洗い場と考えられた。

以上、主要な遺構各々の概要を述べたが、ここで全体を概観してまとめとしたい。

当調査区において、屋敷を区画する遺構は土塁S A 4041・4042と、溝S D 4057・4058があるが、前述のように遺構は前後2期に分かれ、各時期における区画は異なるものと思えた。先ず前期においては、礎石建物やそれに伴う石列などの方向がほぼ一致しており、調査区全体が一つの屋敷と考えられる。後期においては、東西溝S D 4057を挟んだ南と北で建物方向等にばらつきがあり、この時期にS D 4057が屋敷の境界として機能するようになり、土塁と溝で囲まれ井戸・便所・竈を備えた南の屋敷地と、区画は明確ではないが北の屋敷地とに分かれたものと考えられる。 (月輪 泰)

# 遺物 (PL. 10~12)

権殿地係のうち、第75次調査で出土した遺物は総破片数20,542点であった。1㎡あたりの出土遺物量は、発掘面積が970㎡であることから21.2点であり、他地点と比べても標準的な数値であった。内訳は表-2に示したとおりである。出土傾向を概観していえることは、思いの他土師質皿の量が少なかったこと、鉄釉碗の出土が目立ったこと、朝鮮製陶器の徳利形瓶の破片が比較的多くみられたこと、一乗谷で初めて温石<sup>おんじょく</sup>が出土したことなどが上げられよう。

**越前焼** 中甕131は肩部に突帯が巡る特徴的な甕で、焼成はあまく胎土もボソボソしている。第4・7・20・40・42・43・59次調査でも報告されている。132は、片口の中型壺で、肩部にはヘラ記号が刻まれ、自然釉がタツプリかかった端正な作りである。133~135は、お歯黒壺と呼ばれる小壺で、肩部にヘラ記号がみられる。135は、肩部に縦方向の把手がついた珍しい双耳壺で、朝倉館跡からも1点出土している。136の播鉢は、小型で焼成は良く外面に花押が墨書されている。

**瀬戸・美濃焼** 鉄釉碗の出土は多いが、ほとんど同一タイプのものである。139の天目茶碗は、口径8.9cm、器高4.8cmの小型である。143は、灰釉碗で高台は無釉である。144・145は皿で、145の高台は釉葉を拭きとっており、見込みには酢漿草<sup>かたばみ</sup>の文様が押印されている。

**土師質土器** 146は、土師質の金箔皿である。精選された胎土を用い、全面に薄

表-2 第75次出土遺物一覧

器種	破片数	%	
越前焼	甕	1,937	
	鉢	1,003	
	鉢	239	
	播火卸	902	
	鉢	32	
	桶	1	
	皿	25	
	その他		
	計	4,139	20.1
	瀬戸・美濃焼	碗	256
皿		9	
壺		54	
茶入		13	
香深		2	
瓶		36	
その他		20	
鉢		14	
計		404	2.0
土師質		碗	35
	皿	148	
	鉢	30	
	壺	6	
	卸	2	
	香	4	
	瓶	5	
	その他	1	
	計	231	1.1
	瓦質	皿	12,992
釜		94	
土鈴		17	
土灯		1	
耳丸		4	
皿		4	
壺		2	
鉢		1	
計		13,115	63.8
朝鮮製陶器		瓦	1
	燈	12	
	風火	1	
計	29	0.1	
近世陶器・他	184	0.9	
小計	18,102	88.0	
土師質	碗	12	
	徳利	52	
	深瓶	27	
	瓶	1	
	鉢	1	
計	3		
小計	96	0.5	

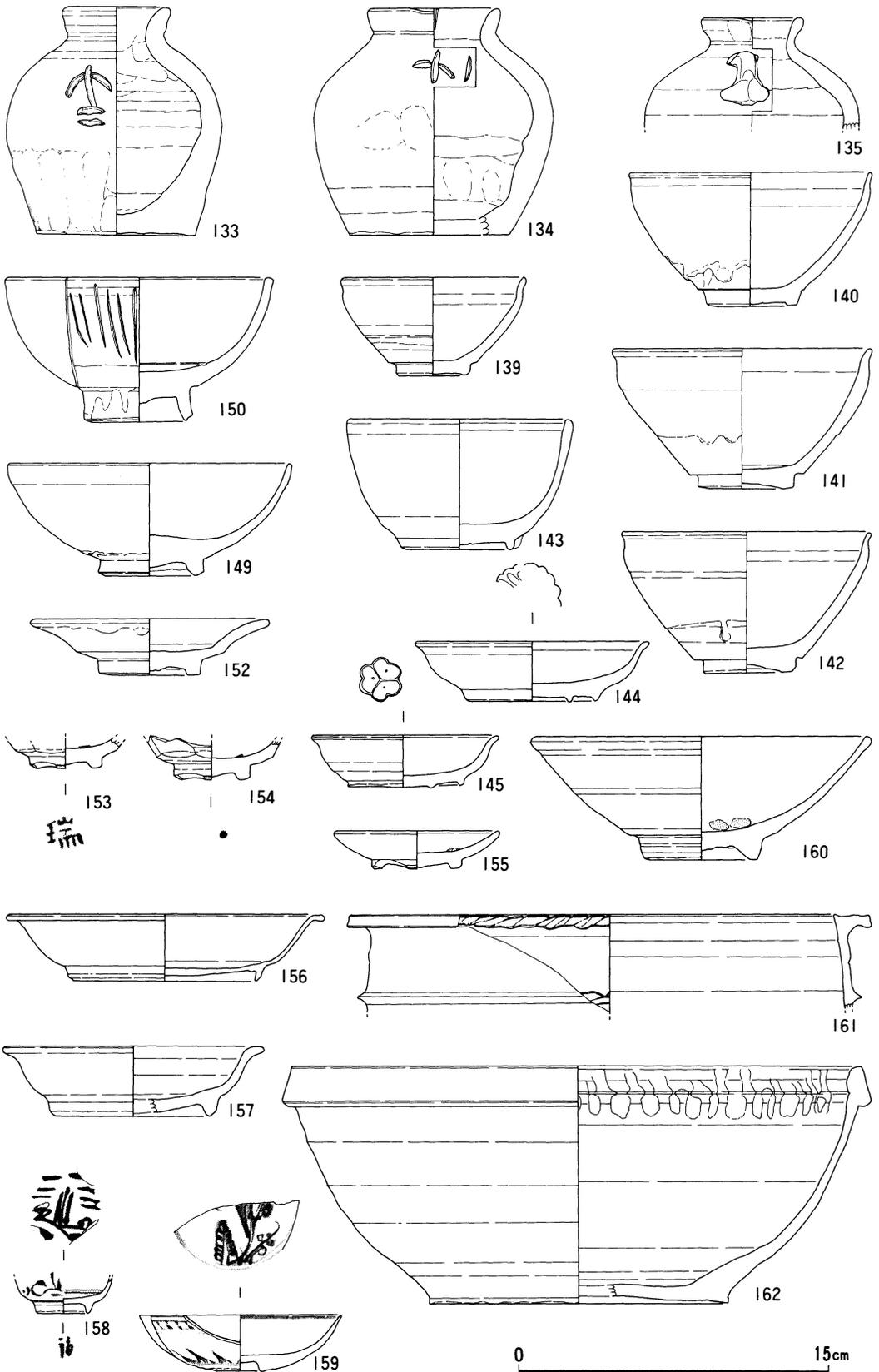
中国製陶磁器	青磁	碗	128	
		皿	149	
		鉢	15	
		盤	3	
		壺	3	
		子	1	
		合香	22	
		瓶袋	3	
		その他	2	
		計	329	1.6
白磁	碗	皿	6	
		鉢	662	
		壺	49	
		瓶	3	
		その他	2	
計	722	3.5		
染付	碗	皿	215	
		鉢	364	
		壺	22	
		鉢	3	
計	604	3.0		
交趾	2	0		
小計	1,657	8.1		
陶磁器合計	19,855	96.6		
金属	銅	釘	195	
		銭	8	
		血	2	
		鐵箸	1	
		製隱の柄	2	
		柄	1	
		楔	1	
		羽具	1	
		手	1	
		金	1	
計	227	1.1		
石製品	バンド	コ	104	
		硯	29	
		石盤	25	
		白	67	
		臼	11	
		臼	3	
		風戸	17	
		石	2	
		温石	1	
		計	144	
小計	403	2.0		
木製品	碗	皿	4	
		駄物	6	
		板	3	
		ラ	2	
		他	3	
計	1			
下	1			
桶	1			
へ	1			
計	11			
棒	1			
炭	11			
他	26			
計	57	0.3		
総計	20,542	100		

く漆(?)を塗り、口縁端部から内面に金箔押ししたもので、金箔の一辺が筋状に認められた。147の皿は内面全体に楓またはハツ手、瓜文様、外面底に文字らしきものが墨書きされたものである。148は、2カ所に円孔の穿たれた皿で灯芯痕は認められない。他にも底に円孔を3カ所穿った皿や、直径2.3cmの灯芯押え、土鈴17点なども出土している。

**瓦質土器** 瓦質製品の出土は、比較的少ない。面取りした獣脚の火鉢や、口縁部が端反りし、胴部に「S」字のスタンプを巡らした小型の香炉、瓦燈の蓋などがみられた。

**中国製陶磁器** 青磁碗149は、腰下部まできれいに釉薬が認められる。150は、粗く蓮弁文を線書きした碗で、割れ口に黒漆がベトリと付着していることから、再使用のため接合したものと考えられる。151は、乳濁色の青磁釉で胴下部に釉だまりがみられる。他には、肌色の胎土で見込みの釉薬を拭きとった青磁碗や、152のような段皿、口径約20cmの輪花形青磁皿、輪花をより表現するため器面に縦方向の弁を線刻した輪花形青磁皿、口径8cmの小さな青磁香炉なども出土している。白磁八角坏153・154は、割り高台で、白濁釉が施されている。胴下部から高台にかけては露胎であり、見込みには目跡がみられる。153の目跡は、1.1×0.4cmの長方形で、4カ所に残されている。高台底には「瑞」の文字が朱書きされている。154には、直径0.4cmの赤色漆の点が付されている。この種の坏には、高台底に必ずといってよいほど墨や朱、漆などで「吉祥句」や文字が書かれるのが通例といえる。155も、割り台の白磁小皿で、これら坏・皿はいずれも14～15世紀代に焼かれた古手の白磁である。156・157は、口縁が端反りの白磁皿である。全体に釉薬をかけ、高台の畳付部の釉を拭きとったものである。一乗谷の白磁皿の主流はこのタイプで16世紀の製品である。青白磁の梅瓶<sup>めいびん</sup>も3点出土している。染付では、碗・皿が多く出土している。159の皿は、外面口縁に波濤文帯、胴部に芭蕉葉文、内面見込みにも芭蕉の描かれた碁笥底タイプの皿で、C群Iに分類される。他にも、見込みに「壽」字文を描いた皿タイプ、見込みに菊花を散りばめたものなどが出土している。また、坏では見込みに相当デフォルメした山水人物文を、高台内に「福」字を描いた小型染付坏158や、見込みに十字花文を配した碁笥底の坏なども出土している。

**朝鮮製陶器** 160は、口径16.5cmの刷毛目茶碗である。高台もしっかりしており、端正な作りである。外面上部と内面全体にかけて鼠色の釉薬を刷毛で流暢に塗っている。内面見込みには、砂目跡が5箇所に残されている。161・162は深鉢である。161は、器壁を薄く仕上げしており、口縁は鐺状に外反させ、その端部と胴部突帯を指によって斜めに押え波状文様を作り出している。162は、口縁を玉縁状に折り曲げた無釉の深鉢で、底部外面は粗い仕上がりになっている。胎土は茶褐色であるが、焼成時に火を強く受けた面は黒ずんでおり、断面は明確に2層となっている。他に雑釉徳利形瓶が何点か出土している。非常に薄



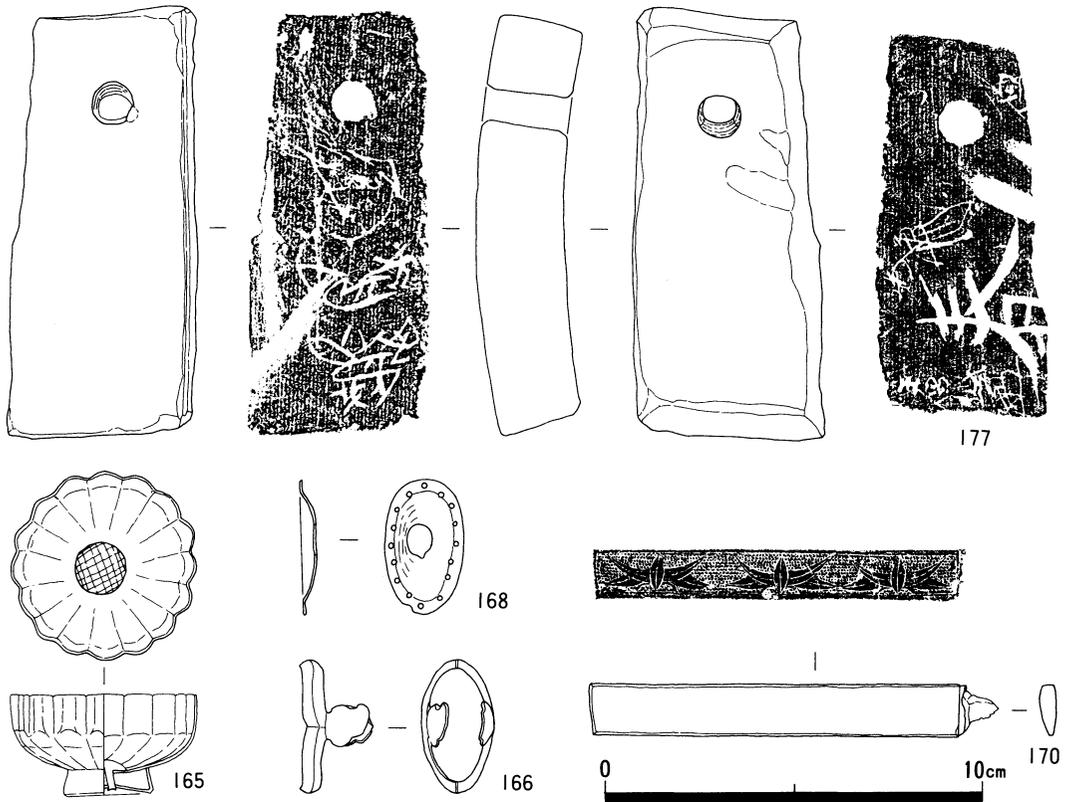
第12図 第75次調査出土遺物

く器壁を挽いており、胎土は茶褐色、一乗谷からはかなり出土するタイプである。

**木製品** 163・164は赤色漆塗り皿である。163の高台には黒漆が塗られ、中央に赤色漆で点を付している。内面には、口縁から見込みにむかって横方向の刷毛目がきれいに施されている。164は、口径8.5cmの小型の皿で、黒漆の塗られた高台中央には赤色漆で「相」の文字が書かれている。いずれも器壁を薄く挽いた丁寧な作りで、上質のものといえる。

**金属製品** 165は、口径5cm、器高2.7cm、16弁の銅製菊皿である。見込みの鉾頭には、格子目状の刻みを施し、鍍金されていた。紅皿か瀧子（鉄漿皿）かは不明である。166は、外面黒漆塗りの太刀の責金で、柏葉を表現したものである。167は切羽、168・169は凸面に渡金した銅製金具1対であるが、用途は不明。170は、鍍金された小柄の柄で、片面に毛彫りで笹の葉文様を3箇所を描き、その余白部分は、魚子打で埋めている。172は鉄鏝、173は銅製箸、174は引手の底金具である。

**石製品** 177は、蛇紋石製の温石である。曲線になっており石鍋か何かを転用して作られたとみられる。両面に「春・侶・仙」の文字や花押、絵らしきものを刻んでいる。温石の出土は当遺跡で初めてである。178・179は、小型のバンドコである。古型式とされる平面「D」字形ばかりが出土し、「O」字形の出土はみられなかった。他に石製盤や石硯も多く出土した。**角製品**としては、駒石175や、賽子176などが出土している。（水野和雄）



第13図 第75次調査出土遺物

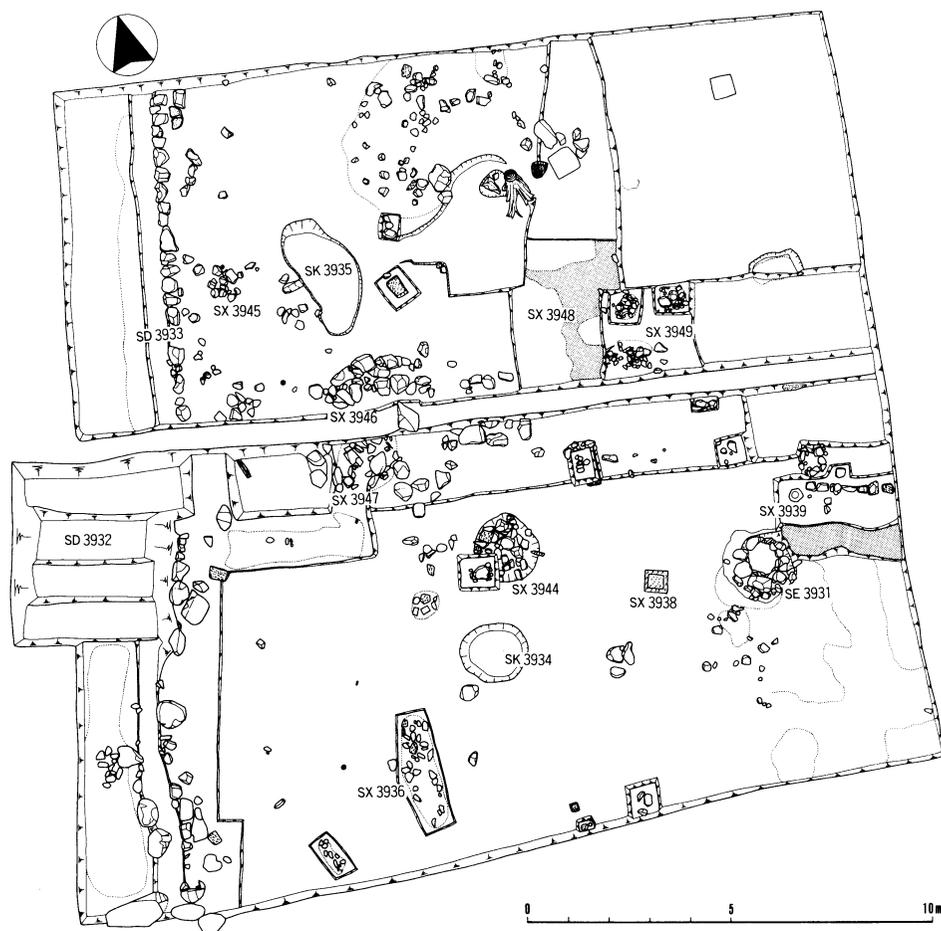
## IV. 第72次調査 (細田一美宅新築工事に伴う事前調査)

本調査は、細田一美宅新築工事に伴う事前調査である。地番は福井市城戸ノ内町6字14-1にあたる。調査対象地は、旧県道鯖江・美山線に沿った宅地跡で、山城に登る「馬出し」・「小淵ガ上」とは一乗谷川を挟んで西岸にあたり、また、第68次調査地区の東に隣接する。調査面積は210㎡で、調査期間は1991年5月7日～5月27日までの20日間であった。

なお、第68次調査地区は「朝倉式部大輔景鏡館跡」に比定され、この「館跡」は第68次調査によって南北96m×東西60m(推定-東半分は水害で遺構が失われていた)で、南北には土塁と濠が存在していたことが判明している。今回の調査では、「朝倉式部大輔景鏡館跡」の東の濠を検出することが目的のひとつであった。

### 遺 構 (PL. 13)

調査地区は、表土を除去してさらに20cm程下げると、調査地区の西端で溝 S D 3933が見



第14図 第72次調査遺構全測図

つかった。この溝は、東側は石を用いていたが西側は素掘で、雨落溝と推定された。S X 3945等がこの雨落溝に対応する建物跡と推定されるが、規模などはよく判らない。この遺構面は、全面に広がっているが、このS D 3933と井戸S E 3931以外はっきりとした遺構は見当らない。出土した遺物から近世から近代にかけての遺構面と判断した。

発掘区の南半分をさらに20～30cm掘下げた。細かい砂混じりの土の遺構面が検出された。この遺構面も目立った遺構はなく、土壌S K 3934・S X 3944が見られるだけである。遺構は見つからなかったが、この面からは18世紀後半を中心とする遺物が割合まとまって出土した。

発掘区中央に残した土層観察用の畦に沿って下層確認のためのトレンチを入れた。トレンチの西端で「朝倉式部大輔景鏡館跡」の濠と思われる一部を検出した。表面観察（S D 3933を検出した段階）でも雨落溝S D 3933付近から西は地盤がやわらかく表面が暗茶褐色を呈していた。濠特有の青灰色粘質土で埋まっていたが、地表面より1.2m付近で砂利層となったことや遺物が1点も出土しなかったことから館跡の濠であるとの確証は得られなかった。トレンチの東は、砂礫層で部分的に人頭大の礫が混じっている。この層には遺物が混入していないことや第68次調査で東半分が一乗谷川の洪水で遺構が流出していること等から、一乗谷川の氾濫原であると判断した。

## 遺物

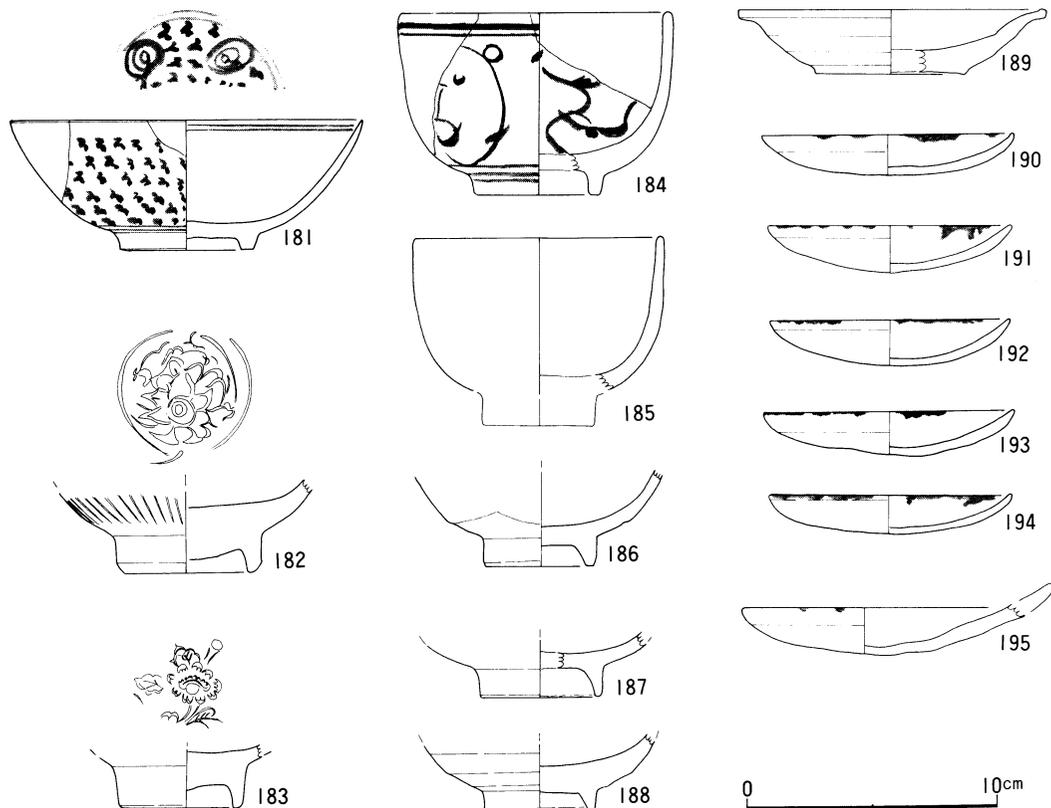
出土した遺物の総点数は1,880点で、このうち2/3は近世～近代の陶磁器で、残り1/3が戦国期朝倉時代の陶磁器であった。遺構面が上記の状態であったので戦国期の陶磁器は細片が多く、図示できたのは第15図の3点ぐらいである。181はC類の染付碗で外表面と見込みには、を6段にちりばめた文様が施されている。高台裏は釉が拭き取られ鉄分が表出して褐色になっている。高台には釉着を防ぐ細かい砂が付着している。182・183は青磁碗でいずれも見込みに印花文がある。182は線刻の蓮弁文が施され、釉色はややくすんだオリブ色を呈する。183はやや青みの強い釉が施されている。石製品では笏谷石製の笠塔婆の笠の部分やバンドコ（行火）の身の部分などが出土している。

184以降は近世の遺物である。184は半磁器で三川内窯の製品がよく知られている。口縁部と腰部の回線の間崩れた唐草文を描くのが特徴である。185は明るい褐色の釉が施されており、この釉は黄瀬戸の系統を引くものであろう。胎土はいわゆるもぐさ土に近い。186は天目茶碗で赤い胎土に天目釉が腰部までかかる。この時期の天目茶碗は全体に丸く口縁部もくびれず高台脇の挟りもはいらぬ。187・188は灰釉の碗で、187は全面に施釉され畳付だけ拭き取られている。釉は全面に細かい貫入が走る。よく焼きしまっているが

胎土はやや荒い。188は畳付と高台裏をのぞいて全面に灰釉がかかる。釉は薄く流れやすい。高台裏には釉着を防ぐ砂が付着する。189は唐津の皿であろう。碁笥底状になっており、釉は内面のみ施され外面は露胎である。見込みには大きい砂の目跡が3箇所残る。これに対応して畳付けにも3箇所砂が付着している。190～195は土師質の灯明皿である。この灯明皿は多数出土しているが、いずれも口径が10cm前後でほとんどバラツキがない。かえって高さの方にバラツキがみられるようである。手づくねで、口縁部は内外面とも巾5mm程ナデ、内面は多方向にナデている。断面はパイの生地のように薄く剥離する。また表面に白泥を塗布したと考えられるものもある。195は、持ったための把手を付けた灯明皿である。これまでの調査で出土したこの手のものは内側に3箇所突起が付けられこの突起の上に灯明皿を乗せて運びやすくしたものであったが、195はその突起がなく、直接灯明皿として用いたもので口縁部に灯心跡が付着している。図示したものは部分的に灯心跡がつくだけであるが、全面に油(?)が付着しているものもある。

近世・近代の遺物では土師質の灯明皿を除くと、三川内窯のものをもっとも多く、次に灰釉がくる。灯明皿とあわせて考えると、越前では豊原寺華蔵院跡の遺構面Aの遺物群(丸岡町教育委員会 1981『豊原寺跡Ⅱ』華蔵院跡第二次発掘調査概報)に相当するが、唐津や伊万里は少ない。

(岩田 隆)



第15図 第72次調査出土遺物

## V. 第73次調査 (大西利信宅新築工事に伴う事前調査)

第73次調査は、大西利信宅新築工事に伴う事前調査で、地籍は福井市城戸ノ内町9字9番にあたる。調査面積は70㎡で、調査期間は平成3年6月25日～7月6日までの約2週間であった。調査地区は一乗谷を挟んで公園センターの東岸にあたる。この地区は一乗谷川が北東から北に大きく屈曲している地点で、過去にはたびたび洪水に見舞われたところである。小字名は「兵庫」で、この地区の東側の高台の小字名は「上殿」である。いずれも朝倉氏の「同名衆」にもとづく小字名である。

### 遺 構

耕土を除去し、さらに20cm掘下げると小砂利による根石が0.9m間隔で2列15箇所見つけた。調査地区の北の端にも2箇所あるところから、この建物は4間×3間の建物とみられるが、この面からはガラスビン・瓦・茶碗など近代の遺物しか出土しなかった。

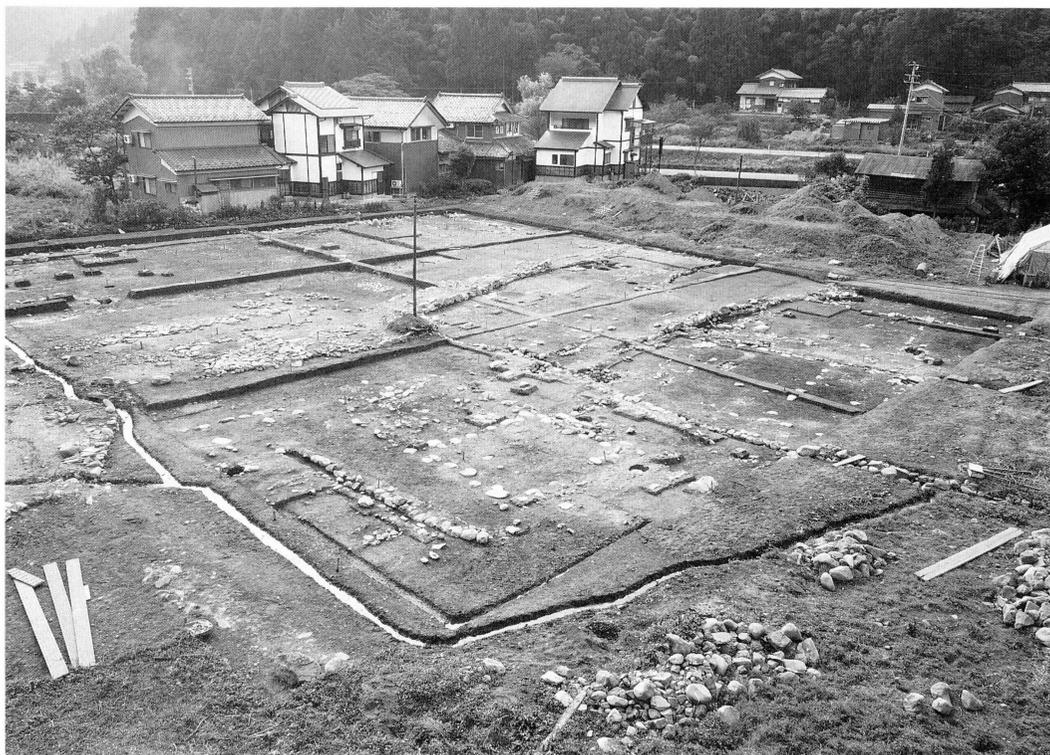
さらに黄色山土ブロックを含む粘質土を30cm下げると、石列と素掘りの溝が検出された。この石列と素掘の溝は一直線上にあるところから、同一の遺構で石列は東側の溝石が失われ、素掘の溝は溝石がすべて失われたものと推定される。溝・石列の方向は南北で、上の建物の方向と同じである。ここでも出土した遺物は、伊万里・波瓦・近代以降の印判による文様の茶碗が混じっており、確認された遺構は近世のものと判断した。

さらに30cm掘下げると、あまり状態はよくないが石列らしき遺構が検出された。この面からも寛永通宝が出土し、朝倉時代以後の遺構面であることがわかった。

発掘区北端でトレンチを入れて下層を確認したところ砂利層となり、この層より下は一乗谷川の河川敷と判断した。(岩田 隆)



第16図  
第73次全景 (北から)



調査区全景（北東から）



同（北西から）



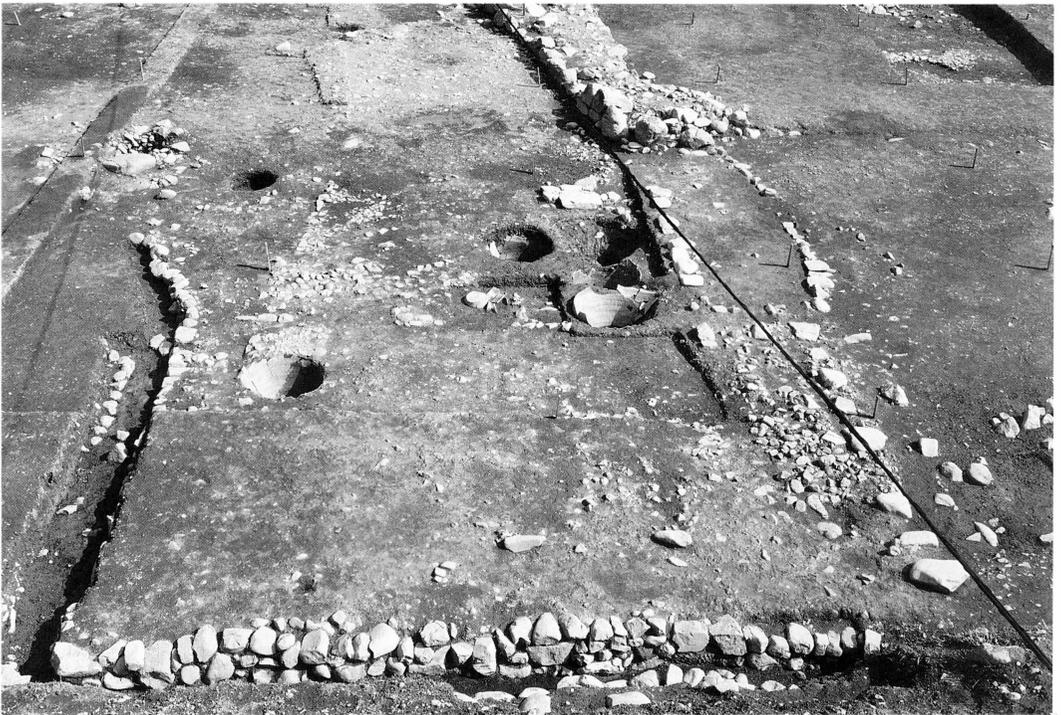
S B 3978~3980 (南から)



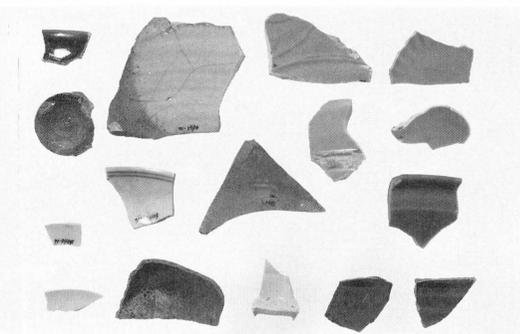
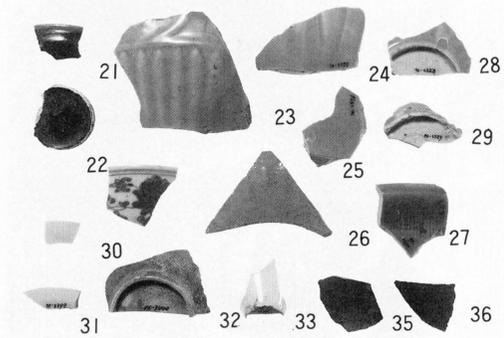
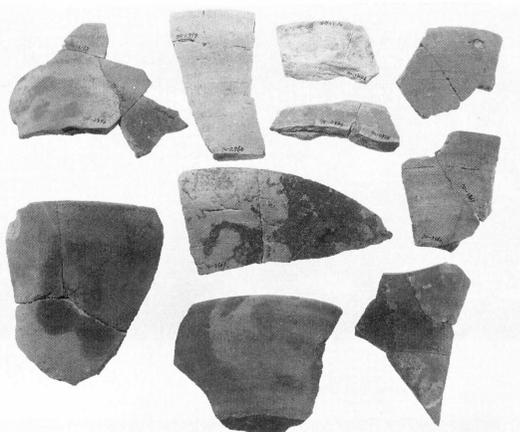
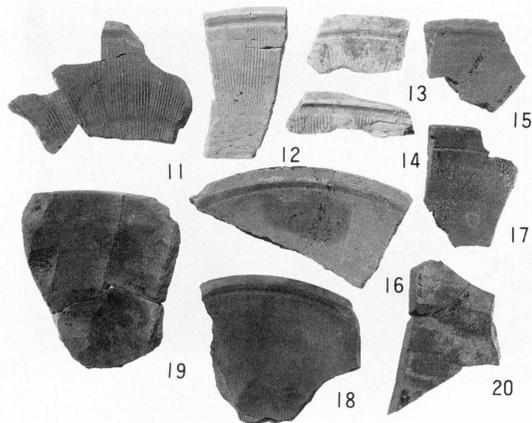
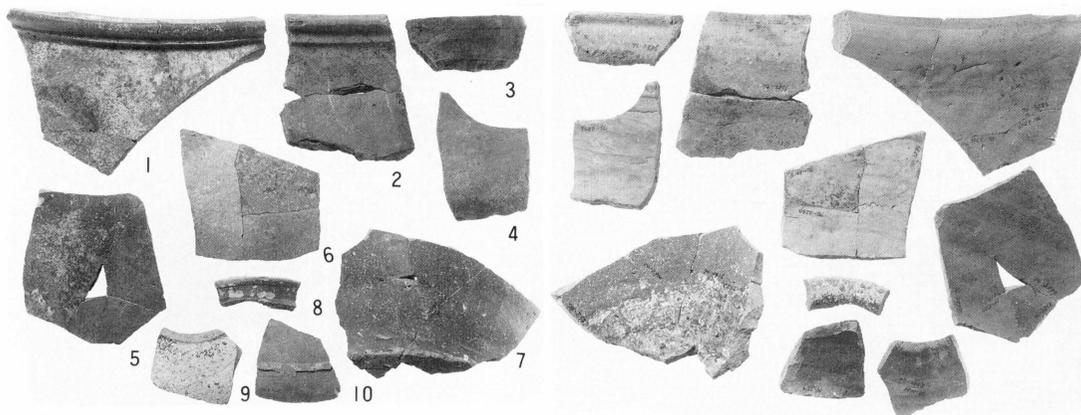
SB3977 (南から)

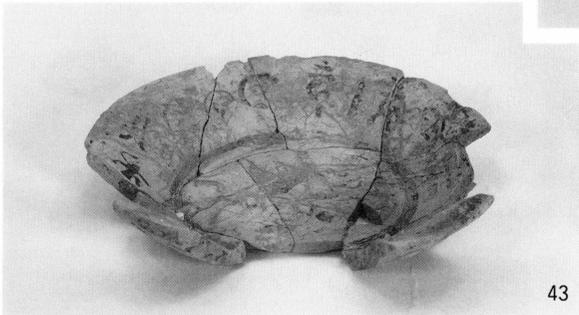
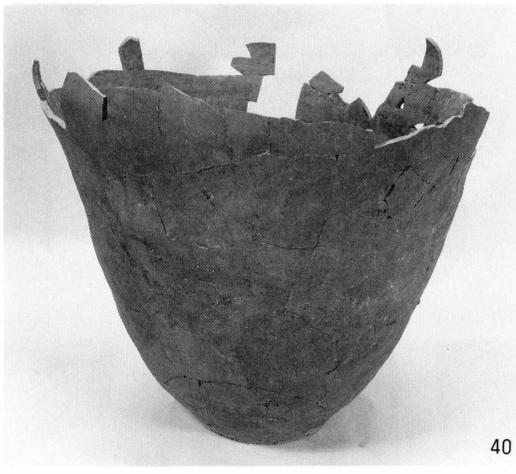


SB3974 (北から)

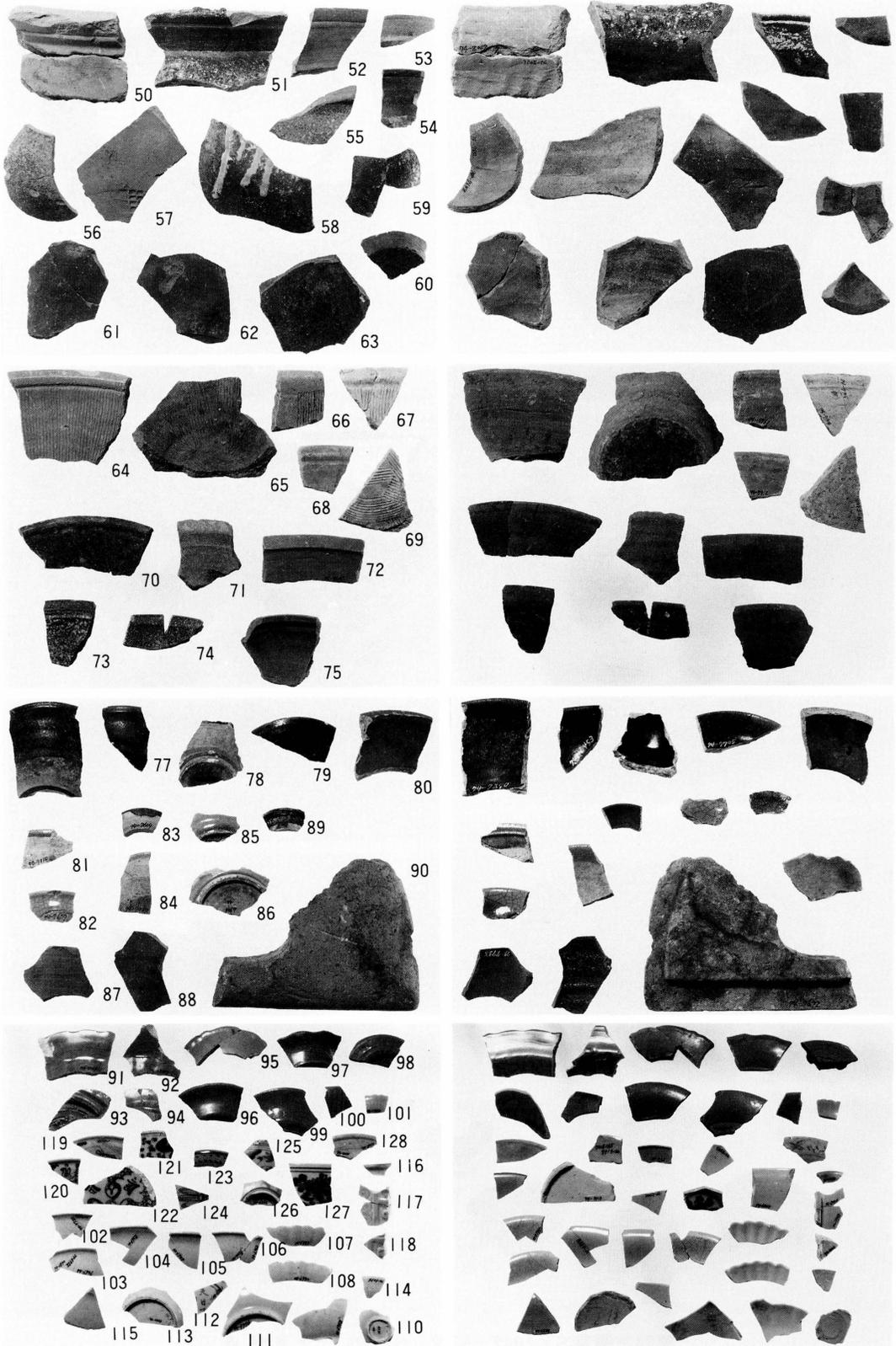


SK4002・4003 (西から)





第74次調査SK 4002・4003、SE3990出土遺物 他



第74次調査SB3974出土遺物



調査区全景（南西から）



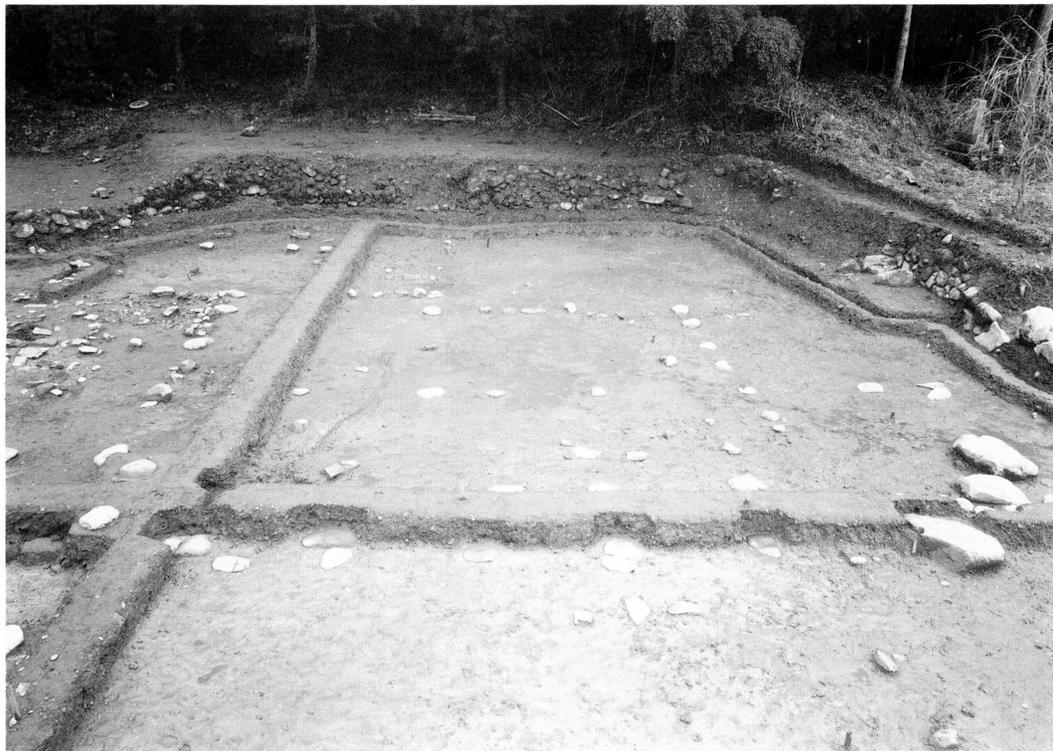
調査区全景（北東から）



調査区北部（南西から）



調査区中央部（北西から）



SB4043ほか（西から）



SI 4064（西から）



136



133



134



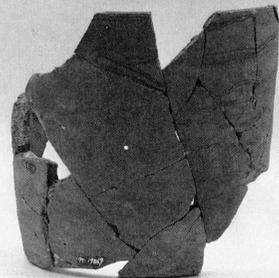
131



132

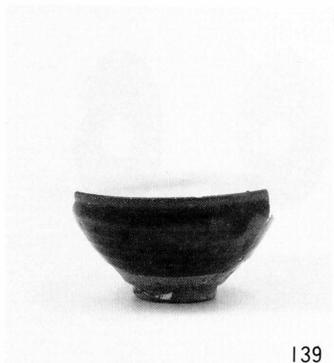


137



138

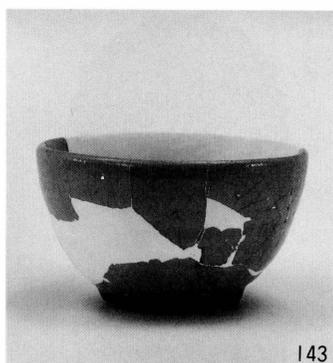
131. 越前焼甕 132~134. 同壺 136. 同播鉢(花押) 137. 同播鉢 138. 同火桶



139



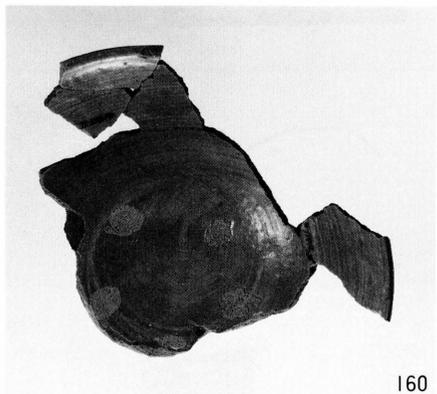
140



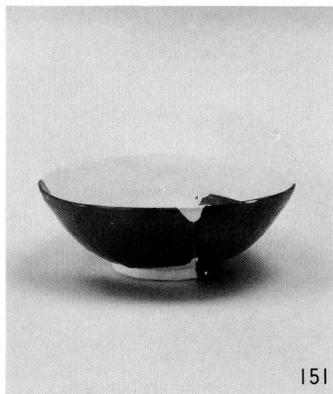
143



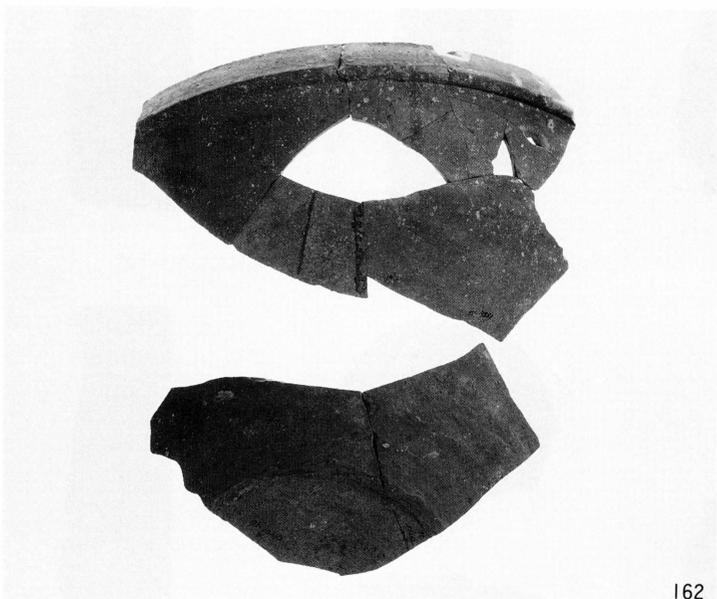
146



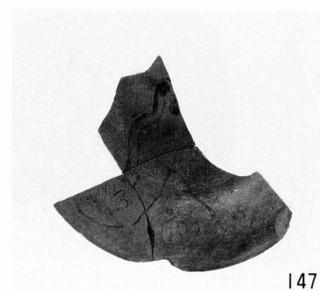
160



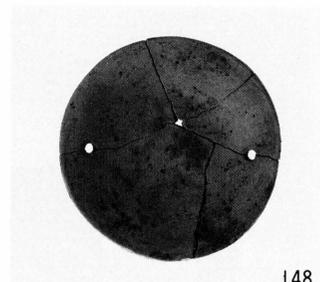
151



162



147



148

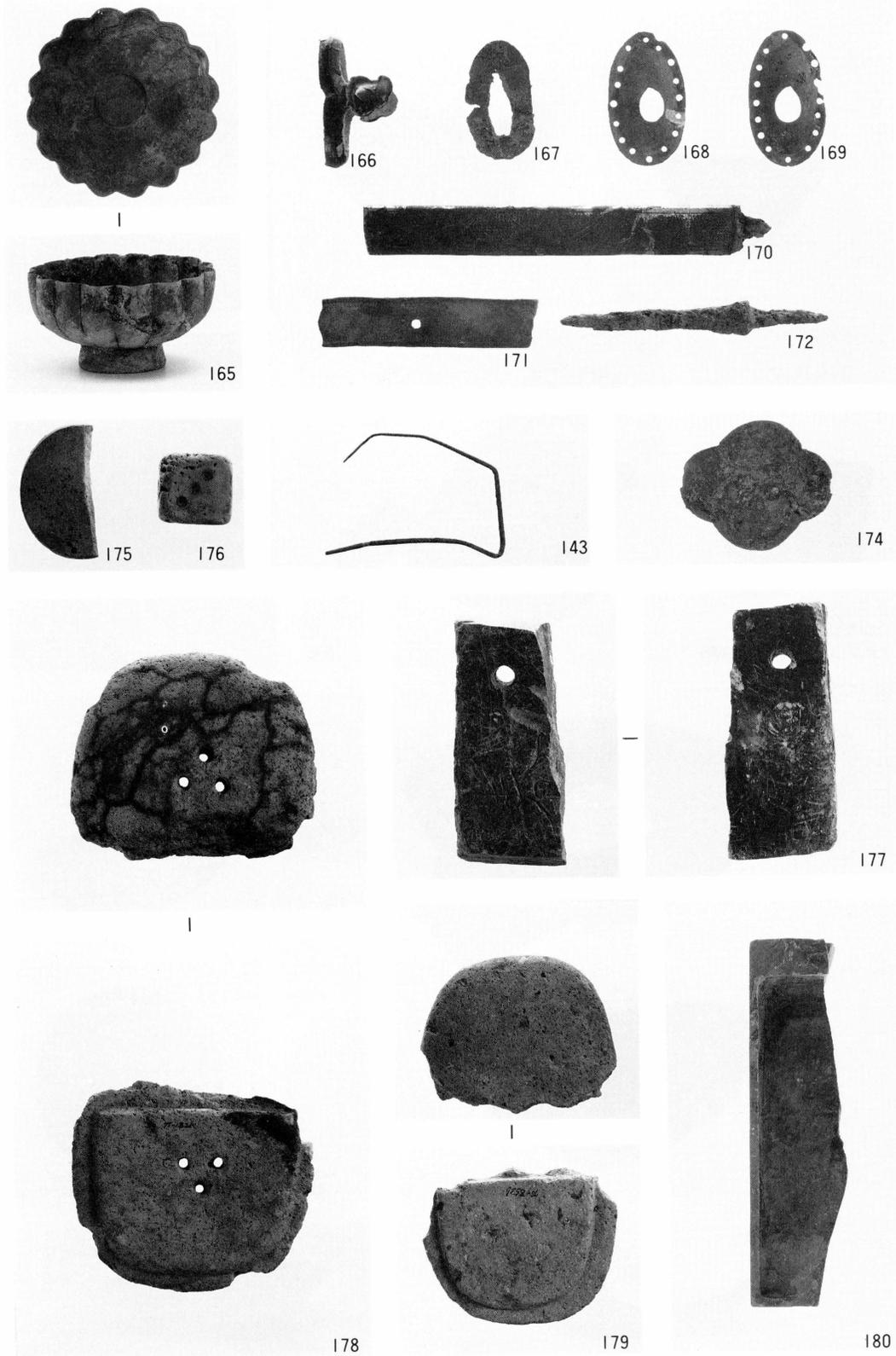


163



164

139.140. 鉄釉碗 143. 灰釉碗 146. 土師質皿(金箔) 147. 同皿(墨書) 148. 同皿(穴あき)  
151. 青磁碗 160. 朝鮮製碗(刷毛目) 162. 同深鉢 163.164. 赤色漆塗り皿



165. 銅製菊皿 166. 貴金 167. 切羽 168.169. 留金具 170. 小柄 171. 金具 172. 鉄鎌  
 143. 銅笥 174. 引手 175. 駒石 176. 賽子 177. 温石 178.179. バンドコの蓋 180. 石硯



▲調査区全景  
(東から)



◀SD3933・SD3932  
(南から)

特別史跡

**一乘谷朝倉氏遺跡**

平成3年度発掘調査概要(23)

発行年月日 平成4年3月31日

編集・発行 福井県立朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社